

医学部と基礎研究

昨年、大学1年生に研究室を紹介する機会があった。将来、様々な学部に進学する二十数名に当分野の研究内容を簡単に説明し、教室員と手分けして実験室を見せて回った。ひとしきり見学した後、ある理系クラスの学生の一言に驚いた。「医学部でこんなに基礎研究をやってるなんて、知りませんでした。」

将来は大学院に進むことも考えているという彼女によると、生命科学の基礎研究は理学部や農学部、あとはせいぜい薬学部が中心で、医学部は医療に直結した応用研究や技術開発に特化していると高校の生物の先生に教わったという。さらに北大に関しては、今も昔も農学部が生命科学研究の中心になっていると聞いていたという。ちなみに、彼女は道外の大都市出身だった。

これはやや極端な例かもしれない。しかし確かに考えてみると、高校の理科や進路指導の担当者の中で、医学部で学んだり勤務したりした経験のある先生は皆無だろう。また、大学院に進んで生命科学の研究者や学術論文などに接した経験のある先生も数少ないに違いない。外からみた医学部は隣にある立派な病院ばかりが目につき、ここでヒトという生物の理解を目指した基礎研究が日夜行われていることなど想像できないのかもしれない。京大の山中伸弥先生のようなスターの登場で、少しは一般の見方も変わっただろうと期待する反面、この問題は根が深いように感じられた。

欧米の医学部は誰もが認める生命科学研究の最前線であり、実際、日本の他学部に所属している生命科学者も留学先は医学部であることが多い。全国の多くの医学部では、MD/PhD コースなどを設けて基礎医学者の育成に力をいれているが、もともと研究指向の強い学生が入学の時点で医学部を敬遠してしまっているのであれば、とても残念なことだと思う。

不況による就職難を背景に医学部の人気が高まっている現状は、優秀な学生を確保する大きなチャンスである。たとえ研究指向の学生が倍増したとしても、臨床医学の魅力が揺らぐはずもなく、それによって臨床医が大きく減るとは想像し難い。むしろ、優れた臨床研究を行う市中病院が現れ、初期研修を大学外で行うことが多くなっている今、基礎、臨床分野を問わず大学に回帰する動機のひとつは、やはりそこで行われている生命科学研究への憧れなのではないかと思う。大学在学中にサイエンスへの興味を育むことはもちろん重要であるが、受験生自身や彼らの選択に大きな影響を与える高校や予備校の先生方に正しい情報を伝えることもまた、必要なのかもしれない。

(田中真樹)

(北海道医学雑誌編集後記 第88号2・3号 平成25年4月より)